

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02560

研究課題名（和文）地方の通信制高校生徒の進路選択とメリトクラシーに関する研究

研究課題名（英文）A Study on Career Choices and Meritocracy among Students in Local Correspondence High Schools

研究代表者

林 寛子（沖田寛子）（Hayashi, Hiroko）

山口大学・教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：20294613

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、通信制課程を全日制課程とは異なるオルタナティブな教育として位置づけて分析を試みた。広域制通信制課程の高校生の多くは、オルタナティブな教育を受けても学校のメリトクラシーのトーナメント戦から外れておらず、高等教育機関への進学を目指す傾向にあった。そして、学校がつまらなくても、その現状を受容しながらメリトクラシーの意識を強く持ち、学校のメリトクラシーに再び参入していた。広域制通信制課程の高校生のメリトクラシーの意識は、アスピレーションの加熱装置ではなく、現状のつまらなさに帰属する冷却装置になっていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究における通信制高校の高校生調査は、通信制課程の広域制と狭域制に注目して量的調査を行ったデータで有り、調査データ自体が貴重である。また、通信制高校の生徒の進路選択の実態を、広域制と狭域制だけでなく、全日制課程と比較検討している点で新規性がある。

本研究で注目した通信制課程の課題は、日本のメリトクラシーを是とする構造や認識を有する全日制課程とオルタナティブな教育を主とする通信制課程の差異が、高大接続や大学入試改革に大きな障壁となっていることであり、その端緒となる本研究で明らかになった通信制課程の高校生の進路選択や努力・学歴に関する意識は、この課題への対応のための重要な知見である。

研究成果の概要（英文）：In this study, we positioned the distance learning program as an alternative education distinct from traditional full-time programs and attempted to analyze it. Many high school students in the wide-area distance learning program were found to remain within the competitive structure of school-based meritocracy despite receiving alternative education, and they showed a tendency to aspire for higher education institutions. Moreover, even if they found school uninteresting, they strongly maintained a sense of meritocracy while accepting the current situation, and re-entered the realm of school-based meritocracy. The study revealed that the meritocratic consciousness among high school students in the wide-area distance learning program functions as a cooling mechanism caused by the perceived dullness of the current situation, rather than as an intensifier of aspirations.

研究分野：教育社会学

キーワード：通信制高校 進路選択 進路指導 メリトクラシー 大学入試 高大接続

1. 研究開始当初の背景

2021年度入試から導入された新たな大学入試は、共通テストにおける記述式問題の導入、大学入試英語成績提供システムの導入、調査書の大学入試における活用等が主な柱として進められていたが、記述式問題の導入、大学入試英語成績提供システムの導入は見送り、中止となった。大学入試改革においては、多様な背景をもつ多様な入学者を大学入試において獲得することが求められており、その流れは現在も同様である。しかし、例えば、現在も大学入試における積極的活用が求められている調査書は、高校経由の大学進学希望者で、新卒後間もない者が対象となるだけで、極めて画一的な入学者の獲得を制度設計することに繋がる懸念があると考えた。

日本社会はメリットの中に属性主義が混入しており、学力と学歴はどのような家庭に育ったのかによって大きな差が生じている。そのため、選抜は、低所得者層や学校文化に適応できなかった者、日本的学校文化に馴染めなかった者、求めなかった者などの特定の人々を排除している可能性もある。大学入試改革の方向性は、評価尺度が多様になっただけで、多様な背景をもった者が抱える進路問題を置き去りにしているという思いから、新たな入試制度の下で、教育の機会は広く保障されるのか、再チャレンジ可能な仕組みが整えられているのかという問い直しが必要だという着想に至った。

中学、高校段階の学業成績は大学進学志望を強く規定することになり、大学進学を希望する者の多くは、高校において全日制、その中でも普通科に所属し、大学進学に有利な出願資格を獲得することになる。つまり、大学入試の出願資格の違いにおいて教育の機会の差が生じることになる。大学入試における出願資格は、「高等学校」(特別支援学校の高等部を含む)又は「中等教育学校」を卒業見込みの者、「高等学校」(特別支援学校の高等部を含む)又は「中等教育学校」を卒業した者がある。と の出願資格の場合は、課程の別として全日制・定時制・通信制、学科の別として普通科、理数科、農業科、工業科、商業科、総合学科、それ以外の学科があり、卒業見込み者卒業生の別として卒業見込み者か卒業生かがある。これ以外の出願資格として、外国の学校、高等学校卒業程度認定試験等を含め と の他に7つの出願資格が設定されている。出願資格で見ると多様な者に大学入試の受験機会が開かれているが、実際の大学の入試実施状況の傾向は、出願資格の と の全日制が中心である。

そのため、近年の社会学や教育社会学における高校生の進路形成の研究や入試研究の多くは、出願資格の と を対象とし、学校トラッキング構造に分析の視点を置いて、進学校や高校の専門学科を含む進路多様校の高校生の大学進学意識、行動を明らかにしてきた(樋口編 2000、中村 2011 など)。しかし、課程の別(全日制、定時制、通信制)に注目して分析するものはない。それは、通信制、定時制の生徒数が全日制と比較して圧倒的に少数であり、定時制、通信制はマイノリティに位置付けられることが一因としてあるだろう。

マイノリティに位置付けられる定時制、通信制高校ではあるが、近年、大学進学者数は1万人を超えている(学校基本調査)。子どもの数が減少しているものの、約30年間で通信制課程の生徒数は増加傾向にある。インターネットなどの多様なメディアの普及により、通信制課程の高校は、ネットを介して授業を受けられるため、全国だけでなく海外からも受講可能な広域通信制高校が増加し、積極的に通信制高校を選択する高校生の存在もメディアでは報告されており、新たな展開を迎えている。通信制高校の生徒が抱えている背景は多様になってきており、今後新たな非直線的な進路選択が増加してくるであろう。その存在は、大学が求める多様な入学者の獲得の対象者になりうるが、現状の大学入試制度のままでは通信制高校の生徒の機会を狭めるのではないかと懸念されることから、通信制課程に注目することにした。

教育機会や選抜に関する研究では、メリトクラシーの概念を用いて説明されることが多い。中村(2009)は、「メリトクラシーは事あるごとに再帰的に振り返って多様な基準から問い直される性質を本来的に持っている。」と説明し、「メリトクラシーの再帰性」の概念を提起している。大学入試改革が進められている今、教育機会の均等、大学入学者選抜の在り方を改めて問い直すために、通信制課程の高校生に焦点を当て、全日制課程との比較によって大学進路選択の実態および高校生の努力・学歴に関する意識等の背景構造を解明することは急務であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、大学入試制度の改善を目的として、「再帰的メリトクラシー」の概念を用いて現在の大学入試の在り方をとらえ、大学入試出願資格(課程)というメリットに注目し、通信制課程の高校生と全日制課程の高校生との実証的比較研究から、大学進路選択の実態およびその背景構造を明らかにし、入試制度の在り方を問い直すことが目的である。

教育と選抜、教育機会について論じるには、出身階層や所得の格差、居住地域の格差など論点は多岐にわたるが、国内外の研究の多くはメリトクラシーの概念を用いて研究が蓄積されている。これらの研究の中で、「現代社会における教育選抜の変動分析に適応可能な理論」として、「選抜する側・選抜される側の行動の原理的な考察も検討可能な行為論的基礎概念」の必要性から、ギデンズの再帰性の概念を踏まえて「再帰的メリトクラシー」(中村 2009)という概念が提

起されている。本研究では、「再帰的メリトクラシー」の概念を用いて、現在の大学入試の在り方をとらえ、通信制課程と全日制課程の実証的比較研究から、通信制課程の高校生の進路選択や努力・学歴に関する意識を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、出願資格（課程）に注目し、先行研究を踏まえて、通信制高校の進路指導の実態を把握するために高校教諭からの聞き取り調査を実施した上で、高校の生徒の大学進学に至る要因や意識、および高校生の努力・学歴に関する意識等その背景構造を出願資格の違いによる比較研究から明らかにするために、通信制課程の高校生だけでなく、全日制課程の高校生を含めた高校生調査を企画し、実施した。

2020年度の計画は、全日制と通信制の両方を設置している山口県の高校7校の高校生を対象に、高校生調査を実施すること、山口県外の広域制の通信制高校の訪問調査を行い、広域制の通信制高校の進路指導の実態、大学進学状況を把握することであった。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行のため、学校が休校になったり、外部の人との接触が制限されたりする状況の中で、当初想定していたようには調査依頼ができず、については訪問調査および高校生調査に協力を頂けた3校の高校生を対象に高校生調査「高校生の進路選択と自己認識に関する調査」（質問紙調査）を実施し分析を行った。についても、新型コロナウイルス感染症の流行のため、山口県外への移動が制限されていたため、2020年度中に広域制通信制高校への訪問調査を実施することは困難と判断し、2021年度に可能な限り訪問調査を実施する計画に変更した。

2021年度は、学校現場の新型コロナウイルス感染症への対応に配慮し、訪問可能な広域制の通信制高校に対してのみ高校教諭を対象として聞き取り調査を行った。通信制課程の高校生を対象とした聞き取り調査も計画していたが、授業見学等にとどめた。また、広域制通信制高校の生徒を対象とした高校生調査「高校生の進路選択と自己認識に関する調査」（web調査）を協力いただいた広域制通信制高校の全国のキャンパスの生徒を対象として実施した。

2022年度は、2020年度に実施した全日制課程と通信制課程の両方を設置している山口県の高校の生徒を対象とした高校生調査「高校生の進路選択と自己認識に関する調査（質問紙法調査）」と2021年度に実施した広域制通信制高校の生徒を対象とした高校生調査「高校生の進路選択と自己認識に関する調査」（web調査）データを用いて、通信制課程（広域制・狭域制）と全日制課程の高校生の比較研究を行った。

新型コロナウイルス感染症の対応として質問紙調査からweb調査に変更したことは、当初の調査計画にはなかった調査を経費の面からも集計にかかる作業の面からも実施可能にした。2022年度に、2020年および2021年度の高校生調査で把握した通信制高校の生徒の居場所となっているサポート校について、大学進路指導や支援の現状と課題を明らかにするためにサポート校の訪問調査を実施し聞き取り調査を行い、さらに全国のサポート校のスタッフを対象とした「サポート校の進路指導に関する調査」（web調査）を追加で企画・実施し、分析を行った。

4. 研究成果

通信制高校に関する先行研究と、高校教諭からの聞き取り調査の内容をもとに、研究論文「山口県の通信制高校の現状と課題」（林 2022a）として公表した。その上で、2020年度に実施した全日制課程と通信制課程の両方を設置している山口県の高校の生徒を対象とした高校生調査「高校生の進路選択と自己認識に関する調査」の分析を行い、研究論文「山口県の通信制課程生徒の進路選択と自己意識」（林 2022b）として公表した。その中で、山口県の通信制課程と全日制課程の生徒の進路選択と自己意識の比較研究から、山口県の狭域制の通信制課程の生徒は、他者との比較の中で生じる能力アイデンティティの揺らぎや自己意識が高校卒業後の進路希望に影響せず、大人の勧め等の影響を受けながら「高等学校卒業」という目的に向けて自分が選択した学びを進めているようすが明らかになった。

また、2020年度に実施した全日制課程と通信制課程の両方を設置している山口県の高校の生徒を対象とした高校生調査「高校生の進路選択と自己認識に関する調査（質問紙法調査）」と2021年度に実施した広域制通信制高校の生徒を対象とした高校生調査「高校生の進路選択と自己認識に関する調査」（web調査）データを用いて、通信制課程と全日制課程の高校生の比較研究を行い、「通信制高校のメリトクラシーに関する意識 - 広域制・狭域制通信制課程と全日制課程の比較分析より -」（林 2023a）として公表した。分析結果から、通信制課程の高校生は、全日制課程の高校になじめないながらも学校的なメリトクラシーを受容し進路選択を行っていること、広域制通信制課程は全日制課程とほぼ同様に学校的なメリトクラシーの中で高等教育機関への進学を目指しているのに対し、狭域制通信制課程は学校的なメリトクラシー下で形成される自己の能力の認識が通信制課程の教育で変わることはなく、高校卒業後の進路が形成できない傾向にあること、広域制通信制課程において「学校の満足度（楽しさ）」が高いほどメリトクラシー意識が低いことが明らかになった。

本研究では、通信制課程を全日制課程とは異なるオルタナティブな教育として位置づけて分析を試みた。広域制通信制課程の高校生の多くは、オルタナティブな教育を受けても学校的メリトクラシーのトーナメント戦から外れておらず、高等教育機関への進学を目指す傾向にあった。

そして、学校がつまらなくても、その現状を受容しながらメリトクラシーの意識を強く持ち、学校のメリトクラシーに再び参入していた。広域制通信制課程の高校生のメリトクラシーの意識は、アスピレーションの加熱装置ではなく、現状のつまらなさに帰属する冷却装置になっていることを明らかにした。

さらに、2022 年度に通信制課程の生徒の居場所の一つとなっているサポート校のスタッフを対象に実施した訪問調査およびサポート校の進路指導の実態調査（web 調査）データを分析し、研究論文「通信制高校サポート校の大学進路指導の現状と課題」として公表した。サポート校は大学進学を可能にするトラックの一つとしての機能を果たし、高等学校と同様の進路指導が行われていたが、障害を抱える生徒への対応、サポート校の運営や経営面の問題、人材確保の問題、生徒の経済的負担に関する問題、サポート校の認知・理解不足の問題等、多くの課題があり、サポート校の問題の構造を明らかにして改善に努める必要があることを明らかにした。

本研究で注目した通信制課程の課題は、日本のメリトクラシーを是とする構造や認識を有する全日制課程とオルタナティブな教育を主とする通信制課程の差異が、高大接続に大きな障壁となっていることであり、その端緒となる本研究で明らかになった通信制課程の高校生の進路選択や努力・学歴に関する意識は、この課題への対応のための重要な知見であると考えられる。

<参考文献>

- 林 寛子, 2022a, 「山口県の通信制高校の現状と課題」, 『やまぐち地域社会研究』19, 55-67 .
 , 2022b, 「山口県の通信制課程生徒の進路選択と自己意識」, 『大学教育』19, 1-9 .
 , 2023a, 「通信制高校のメリトクラシーに関する意識 - 広域制・狭域制通信制課程と全日制課程の比較分析より - 」, 『日本社会分析学会』50, 111-124 .
 , 2023b, 「通信制高校サポート校の大学進路指導の現状と課題」, 『やまぐち地域社会研究』20, 1-12 .
- 樋口大二郎編, 2000, 『高校生文化と進路形成の変容』, 学事出版 .
- 中村高康, 2009, 「メリトクラシーの再帰性について 後期近代における『教育と選抜』に関する一考察」, 『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』35, 207-226 .
 , 2011, 『大衆化とメリトクラシー 教育選抜をめぐる試験と推薦のパラドクス』, 東京大学出版会 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 林 寛子	4. 巻 50
2. 論文標題 通信制高校のメリトクラシーに関する意識 - 広域制・狭域制通信制課程と全日制課程の比較分析より -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本社会分析学会	6. 最初と最後の頁 111-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 寛子	4. 巻 20
2. 論文標題 通信制高校サポート校の大学進路指導の現状と課題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 やまぐち地域社会研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林寛子	4. 巻 19
2. 論文標題 山口県の通信制課程生徒の進路選択と自己意識	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学教育	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林寛子	4. 巻 19
2. 論文標題 山口県の通信制高校の現状と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 やまぐち地域社会研究	6. 最初と最後の頁 55-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林寛子	4. 巻 18
2. 論文標題 山口大学の入学者モデルの検討 多様な入学者の受け入れを目指して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学教育	6. 最初と最後の頁 10-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------